金の星の子どもたち

L·ベヒシュタイン——藤田圭雄訳

ドイツ民話

あかね書房

こども世界の民話4
金の星の子どもたち

＊訳　者
藤田圭雄（ふじたたまお）
＊発行者
岡本陸人
＊印　刷
錦明印刷株式会社
新興印刷製本株式会社（本文組）
＊製　本
中央精版印刷株式会社
＊発行所
株式会社 **あかね書房**
東京都千代田区西神田 3−2−1 〒101
電話 東京（263）0641〈代〉

1969年12月20日発行
＊**定価480円**

■訳者略歴

藤田圭雄（ふじたたまお）

1905年東京に生まれる。早稲田大学独文科卒業。中央公論、婦人公論編集長を経て、雑誌「赤とんぼ」を作る。著書に『ぼくは海賊』『けんちゃんあそびましょ』『山が燃える日』ほか、訳書に『アルプスの少女』『グリム童話集』などがある。

■画家略歴

井上洋介（いのうえようすけ）

1931年東京に生まれる。武蔵野美術大学卒業。イラストや舞台美術に活躍。児童書のさしえに『目をさませトラゴロウ』『ちょんまげ手まり歌』『はらぺこのオニごっこ』等多数、著書に漫画集『サドの卵』他がある。第11回文春漫画賞受賞。

NDC 943

ベヒシュタイン，ルードウィヒ
金の星の子どもたち　ベヒシュタイン著　藤田圭雄訳
あかね書房　1969
116p　23cm（こども世界の民話4）

©1969 Printed in Japan 訳者との契約により検印なし

8397-12004-0027

の子どもたち

L・ベヒシュタイン 著＝藤田圭雄 訳
井上洋介 絵

こども世界の民話——4——ドイツ編

あかね書房版

もくじ

魔法にかけられた王女……7
むくどりとおけ……27
こなやと水の精……39
なみだのつぼ……57
小さなひつじかいのしあわせなゆめ……61
きびどろぼう……85
金の星の子どもたち……97
あとがき……114

表紙デザイン／JAC
イラストレーション／井上洋介

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈著者紹介〉

ルードウィヒ・ベヒシュタイン（Ludwig Bechstein）は、一八〇一年、ワイマールに生まれました。マイニンゲンの王室図書館司書や文書管理官をつとめるかたわら、ドイツの伝説や寓話を集成し、古文書を刊行しましたが、なかでも「ドイツ童話集」「新ドイツ童話集」が有名です。一八六〇年、マイニンゲンで亡くなりました。

魔法にかけられた王女

むかしむかし、びんぼうなだいくさんがいました。このだいくさんには、ふたりのむすこがありました。

ひとりは、きだてのいい子で、ハンスといい、もうひとりは、ずるがしこい子で、ヘルメリヒといいました。

でも、せけんによくあることですが、父親は、きだてのいい子よりも、ずるがしこい子のほうを、ずっと、ひいきしていました。

さて、あるとし、そのとしは、いつものとしよりも、もののねだんがたかくなり、だいくさんの家では、お金のない日がつづきました。

やれやれ、なんとか、生きていくみちを、かんがえなくてはならん。これまでは、お客のほうで、こちらへ、お金をはらいにきてくれた。でも、こんどは、こっちからでむいて、お金をもらいにいかなくてはならん。

だいくさんは、そうおもいました。そして、そうすることにしました。

朝はやく、だいくさんは、家をでました。そして、りっぱな家を、なんげんもたずねま

した。

でも、りっぱなお客ほど、すぐ、お金をはらってくれないものです。請求書どおり、よろこんではらってくれるひとは、ひとりもありません。

だいくさんは、くたくたになって、夕がた、村へかえってきました。そして、居酒屋の入り口のまえに、ぽっつりと、かなしそうなようすをして、すわりこみました。

いつものおなじみのなかまと、おしゃべりをする気にもなれないし、ましてや、おかみさんのふくれっつらを、見たくもなかったからです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

でも、そうやって、じっと、かんがえごとをしていても、居酒屋の中からきこえてくる話は、しぜんに耳にはいってきます。

ちょうど、みやこからやってきた、みしらない男が、なにか、しゃべっています。

いま、みやこでは、うつくしい王女さまが、いやらしい悪魔につかまって、ろうやにとじこめられている、そして、もし、悪魔がだす三つのもんだいを、とくことができる男があらわれないかぎり、王女さまは、いつまでも、ろうやにいなければならない、というのです。しかし、もし、その三つのもんだいがとければ、そのひとは、王女さまも、たくさんのたからものも、お城も、みんな、もらえるというのです。

だいくさんは、この話を、はじめのうちは、耳はんぶんほどできいていましたが、そのうち、耳ぜんぶで、しまいには、りょうほうの耳で、むちゅうになって、ききました。

なぜかというと、だいくさんは、その話をききながら、こんなことをかんがえたからです。

うちのむすこのヘルメリヒは、とてもあたまがいい、なにしろ、やぎのひげをそってほ

しいと、たのまれたくらいだ。あの子なら、そのもんだいをといて、うつくしい王女さまのおむこさんになり、ゆくゆくは、この国の王さまにもなれる。なにしろ、王女さまのおとうさんの王さまが、そういうおふれを、おだしになったというのだからな。

だいくさんは、すぐ家にかえりました。

そして、かした金のことや、お客さんのことなんか、すっかりわすれて、いまきいたうわさ話を、おおいそぎで、おかみさんに話しました。

よく朝、だいくさんは、ヘルメリヒに、馬と武器をよういしてやるから、すぐ出発しなさい、といいました。ヘルメリヒは、いそいそとでかけていきました。

でがけに、ヘルメリヒは、おとうさんとおかあさんに、やくそくしました。

すぐに、おとうさんとおかあさんと、それから、まぬけなにいさんのハンスを、六頭だての馬車で、むかえにこさせますよ。

なにしろ、ヘルメリヒは、もう、王さまになったようなきもちだったのです。

すっかりはしゃぎきって、道でであうものみんなに、わるふざけをしていきました。

木のえだにとまって、じまんのうたで、神さまをほめたたえている小鳥を、むちでえだからおいはらったり、ともかく、道であった動物たちで、いじめられないものはありませんでした。

さいしょにであったのは、ありづかですが、ヘルメリヒはそれを、馬にふみにじらせました。そして、ありが、おこって、馬やヘルメリヒの足によじのぼり、かみつくと、ヘルメリヒは、それをぜんぶ、たたきおとしたり、ひねりつぶしたりしました。

もうすこしいくと、きれいな池のそばにでました。池には、かもが十二わ、およいでいました。ヘルメリヒは、かもを岸におびきよせて、そのうちの十一わを、ころしました。十二わめだけが、やっと、にげていきました。

さいごにみつけたのは、きれいなすの中にいる、みつばちでした。ヘルメリヒは、ありのときとおなじようなことを、みつばちにもしました。

つみのない生きものを、なんでもないのに、ただおもしろがって、くるしめたり、ころしたりするのが、たのしかったのです。

日がしずむころ、ヘルメリヒは、王女さまが、魔法にかけられて、とじこめられている、りっぱなお城につきました。

ヘルメリヒは、力いっぱい、しまっている門をたたきました。あたりは、しいんとしていました。ヘルメリヒは、もっと力をいれて、どんどんと、戸をたたきました。

とうとう、まどの戸を上へもちあげて、くものすのように、しわのあるおばあさんが、かおをのぞかせました。そして、きげんのわるい声で、なにかようかね、とききました。

「王女さまを、たすけにきたのです。あけてください。」

ヘルメリヒはさけびました。

「いそぐことはないさ。あしたという日もあるよ。九時きっかりに、おいで。まっているよ。」

そういうと、おばあさんは、まどをばったりとしめました。

よく朝、九時に、ヘルメリヒがまた、きてみると、おばあさんは、小さいたねがいっぱいはいったおけをもって、ヘルメリヒをまっていました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com